

『みやぎの社会科教室』一九六〇年五月（東京書籍）

中学年における特色ある地域の選定条件について

国立教育研究所 矢口 新

三年と四年では中心のテーマは郷土学習ということになっている。これは児童の住んでいる町や村、あるいはもうすこし広い郷土という社会をとりあげて、社会とは何ぞやということ学習させるといふことである。この学習の観点はだいたい四つあると思う。一つは社会は生きている一つの実体であるということ。二にはそれは時間的に生きつづけているということ。第三にそれは広い社会の中の社会であつて、孤立して存在するものではないこと。そうして第四に、自然環境との関係においてさまざまな社会生活の形態が生まれていること。この四つである。この四つの観点からさまざまな単元が生まれて来る。

つねに広い視野でさまざまな社会、つまり他の地域社会、他人の郷土を見ていなくてはならない。社会は生きているということでも、特殊な存在として自分の郷土だけを見ていたのではほんとうに理解できない。広い社会の中の社会ということはもちろん他の地域社会との関連もみなくてはならない。自然と人間生活との関連もただ自分の社会のそれのみをみているだけではほんとうに理解できない。さまざまな社会をみている必要がある。

元では、自分の郷土を生きている実体として認識するが、そのみでは一つの特異的存在をとりあげただけであつて、科学的に社会一般を認識したことになるから、他のさまざまな類型の地域社会をとりあげて、生きている社会ということを一一般化する必要がある。たとえば農村であるなら、他の農村、山村、漁村、都市などをとりあげて、一般的にどの社会でもこのように一つのものとして生きているのだと認識させる必要がある。また生きているためには社会のもろもろの機能が一つのものとしてまとまっているということこそでわからせる。この場合の地域の選定は、できるだけ典型的な社会、つまりふつうの社会がよいのである。すなわち一つのものとして生きているということが明瞭にとらえられるものがよい。あまり複雑な見かたをしないでもわかる社会がよい。

つぎに四年生でもとりあげることになつていく広い社会の中の社会という観点で学習する場合は、もとより自分の社会を出発点として、それとの生活関連を分析していくわけである。関連ある社会については関連するかぎりにおいてやはり分析をし

ていくことが必要になる。なぜ自分の郷土社会とそのような関連が生じたかというような点である。

つぎに自然との関連から社会を類型的に把握する訓練をする学習が必要である。この学習では自然と人間生活、社会との基本的な関係をつかむのである。やがて日本という社会をみる土台ともなるものであって、その点から広い視野に立つて考えてよい。

指導要領では、地形、気候についてほしいの指示が出されているが、基本的にはそれでじゅうぶんであろう。あまりむずかしく考える必要がないと思う。それでは、何でもよいのかという質問ができるかもしれない。おおざっぱに言えばそれでよいのである。問題はむしろ科学的にその社会をみて自然と人間の間を分析することが大切な点から。

しかしそれでも何となく漠然としているので困るかもしれない。地形と生活の問題を考えるには、まず手近な自分の県でそういう顕著なものがあれば、そこで自分の郷土と比較して考えてみる。そしてつぎに全国的に典型的とみられているものをとりあげて一般化する。自分の県だけでやれない

ときは東北地方でやる。それから全国的にみるという方法である。気候については、県内ではあまり顕著なものがないので、これは最初から、東北と対立する諸地方をとりあげていく。たとえば北陸とか、瀬戸内海とかというように。その中で一つの小さい地方をとりあげれば、より具体的になるであろう。